

## 報告と交流

## 学校図書館のいま ～法改正はしたけれど～

講演 水越規容子 氏

(学校図書館を考える全国連絡会)

報告 藤本幸子 氏

(さいたま市 学校図書館司書)

報告 渡辺和子 氏

(所沢市 たんぽぽ文庫)

学校司書法制化を受けて、報告と交流をテーマに、水越先生に学校図書館の現状についてお話しいただくとともに、県内からは学校司書、地域文庫の立場から、それぞれ取り組み等お話しいただきました。



### ■講演 水越規容子氏

学校図書館を考える全国連絡会は、全国それぞれの地域の「学校図書館を考える会」などのネットワークとして、年1回の集会とその記録誌の刊行などを行っています。すべての地域の学校にきちんとした学校図書館を実現したいという思いで活動しております。

学校図書館の現状、学校図書館はどう捉えられているかということ、国や自治体など、教員や学校司書など現場で学校図書館にかかわっている人、保護者や市民、マスコミ、研究者や有識者など、それぞれの立場によって認識・評価に大きなズレがあると感じています。

1997年の学校図書館法改正により12学級以上に司書教諭が発令されました。しかし、司書教諭の配置だけで学校図書館活用が十分

可能になると考えられてしまったのです。一方、先進的な自治体は独自に学校司書を配置し、成果を挙げていきました。そうした成果の発信や、市民を含む様々な運動もあり、学校司書の必要性が次第に認められてきたことで2014年の法改正となりました。

学校図書館の整備については、『ひと・もの・かねを欠く』といった現状です。文科省図書標準を達成している学校は、小学校約6割、中学校約5割となっています。図書標準を達成しているといっても、実際には使えない古い資料をカウントしている場合もあります。また、図書購入予算が十分ではなく、図書整備のための地方交付税が3割程度しか実行されていないとの報告もあり、古い蔵書の買い替えまで手が回らない場合が多いのです。そして、司書教諭はいるものの、担任や他の校務分掌との掛け持ちで、図書館を担当している時間は週平均約1.5時間です。また、学校司書については配置が徐々に増えているものの、地域間・学校間格差の広がりがあります。資料があってもそれを活用していくためには人が必要であり、『要は人』といえるでしょう。

学校司書について詳しく見ていくと、法改正により「学校司書」の職名が確立され、専門的な仕事であると認識されるようになりました。学校司書配置率の推移は、10年前と比べ小中学校では約2倍に増えています。しかし、雇用状況は約8割が非常勤で、採用条件も資格・経験なしが3割を超えています。一概に配置といっても、実態は多種多様なのです。地方交付税の算定式にある「2校に1人程度」によって、2校に1人でいい、あるいは週3日でもいいという誤解を生んでしまいました。どんなに能力や意欲があっても、週1日、1日3時間では教員との連携も不可能に近いでしょう。学校図書館に関わる人が声を上げていくことがますます重要です。

子供たちが本にふれあう場所として、学校

図書館は基盤であり、学校図書館こそ充実しなければなりません。学校全体・地域全体で学校図書館を見守り育てていきたいと思えます。

#### ■報告1 さいたま市 藤本幸子氏

さいたま市は、「さいたま市の子どもたちは、日本で一番本が好き」の実現を目指して、現在、全ての小中学校に司書を配置しています。1校に1名、1日6時間、週4日間の勤務で、長期休業中の勤務は原則なく、立場は非常勤職員です。

片柳中学校は、平成28年度文部科学大臣表彰を受賞しました。年間を通じ毎朝10分間の読書を、全校生徒と教職員で取り組んでいます。その他の主な実践は、図書館オリエンテーションや読み聞かせの実施、おすすめの本の紹介、本の面出し紹介、本の帯を利用したしおりのプレゼント、読書感想文入選作品掲示、生徒向けと教職員向けの図書館だよりの発行等です。図書委員会ではポスターやポップや新聞の作成、読み聞かせ、読書クイズ、ブックトーク等を行いました。

私が図書館運営において大切だと感じていることは、まず、「司書は、新刊も含めてより多くの本校図書館の本を読むこと」です。本の内容を知らなければ、生徒の質問や要望に的確に対処できません。次に、「生徒ひとりひとりに、挨拶や声掛けをすること」です。借りた本や返した本に対して、一言でもコメントを出すよう心がけています。自分のことを見ていてくれると分かった生徒は、信頼を寄せてくれます。そして「先生方にクラスで本についての話をしていただき、授業で図書館や資料を利用してもらうこと」です。先生方の本の話聞いて、生徒が本を借りに来ます。授業で来館すると、資料の利用の仕方が向上するとともに、深い知識も身につけられ、気になる本と出会う機会も増えます。

この報告が、みなさまにとって少しでも参考になりましたら幸いです。

#### ■報告2 所沢市 渡辺和子氏

所沢市では1981年に文庫連ができ、当時40団体ほどありましたが、現在は11団体がかかわっています。その中で、たんぼぼ文庫は「本のある遊び場」として30年近く活動しています。全国的にも文庫活動の最盛期を過ぎた1980年代以降、文庫や図書館に来る子供が減っているということから、全ての子供が通う学校図書館に目が向いていくようになります。文庫連の活動として、近年は所沢市の公共図書館や学校図書館の見学もしています。

学校図書館と文庫に共通することは、子供に本を手渡すということです。文庫では、子供からリクエストのあった本は、公共図書館から借りて置くようにし、一人一人の読書傾向をつかみながら本を選んでいきます。ブックトークなど、学校で紹介された本は子供たちが興味を持って借りていきます。また、人と人とのつながりが安心感となり、子供たちの居場所にもなっています。

私自身の学校図書館とのかかわりは、長女の担任の先生が司書教諭で、本の修理などを行っているのを知り、お手伝いを申し出たのがきっかけです。当時は、図書ボランティアという名前もなく、知名度も低く、特定の保護者が学校で活動しているのが他の子供に見られると困ると言われたこともありましたが、今では地域の教育力の活用といった方針もあって、多くのボランティアが学校に入っています。読み聞かせのボランティアもでき、私もOGとして活動しています。

所沢市は学校司書がまだ全校に配置されていません。学校司書の配置や研修体制の確立、図書館資料の整備・充実に願っています。

3人の講師の先生の講演・報告の後、参加者の皆様から先生方への質問や、それぞれの地域での取り組みの報告などがあり、交流を深めました。